帛、とりわけ帛は富として所藏されることもあったが、前漢後期に貨幣的機能をもち始め、王莽代以降、後漢代に貨幣化する。そしてこれは右の衰退という事態と相應ずる。

ホージャ・アフラールの不動産登記文書
——十五世紀中央アジアの不動産所有について——

川本正知

十五世紀後半、ティムール朝治下のサマルカンドにおいて、イスラム神祕主義教團ナクシュバンディー教團のシャイフとして活動したホージャ・アフラールは莫大な不動産を所有していたことが知られていた。しかし、その實態を具體的に知ることができるようになったのは、一九七四年チェホヴィチによって、彼の不動産に關する文書集が出版されたことによる。

この文書集には十五世紀の文書が十二通含まれ、そのうちの四通がワクフ文書、殘りの八通がいわゆる不動産登記文書である。イスラム圏全體を見回してもこの八通の不動産登記文書は、出版されたものとしてはもっとも初期のものに屬する。

この八通の不動産登記文書の書式、內容を調べていくことによって當時の中央アジアにおける不動産所有、すなわち milk 所有とはどういうことであったかを明らかにしてみたいと思う。それはおそらく、ワクフと同じように、單に中央アジアにとどまらずイスラム圏全體におけるこの時期の不動産所有ということを考えるための一例とすることができるであろう。また、そうすることによってホージャ・アフラールという人物の莫大な不動産所有を當時のイスラム社會の文脈の中で正當に評價することができるであろう。

乾隆カシュガル蜂起
——伯克支配力とオアシス權力構造基底部——

眞田安

乾隆二十五年七月に、カシュガル地方のベシュケリム地方を中心に蜂起が發生した。この蜂起は、清朝の新疆統治上の觀點からすれば微々たるものにすぎなかったが、この蜂起を分析することによって、あたかも火山から噴出したマグマの分析が地球の內奧部を知らしめるように、オアシス社會の內部が明らかになってくる。

當蜂起の指導者は、行政行爲を逸脫した權力行使を專らにしていたというウイグル人支配者伯克（bek）層のうち、征服者淸朝と結びついた三品阿奇木伯克とは別の、カシュガルで採用、任命された、いわば土着伯克層である。この伯克たちの動向、蜂起の原因、動員力、地域的廣がりを考えることにより、土着伯克の支配力の實像が浮びあがる。彼ら伯克の支配力の實態の中に、征服者權力と同時に土着支配者からもウイグル人民衆が支配されていた支配の枠組、換言すれば支配者側の權力行使が可能な權力構造の、その基底部分が露わになっている。そして、そのような民衆に對する權力の接點の部分が見えて來た時、かってラケットがワクフ文書として紹